

令和2年9月1日発行 春燈/第75巻第9号(毎月10日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物認可

春燈

9
月号

2020 September



安住敦の句

燕来るアンデルセンは麵麩屋の名で

『柿の木坂雑唱』昭和五十五年

パン屋の前を通る時の焼きたてのパンの香りは幸せな気分を誘う。幼い頃読んだ童話に『幸福な王子』という話がある。像の王子が、自分の像に嵌め込まれた宝石や金を町の困っている人々に分け与えていく話は、多くの方が知っておられよう。この時、王子に頼まれて届けていたのは燕。安住先生は、焼きたてのパンの香からこの童話の世界がよみがえって来たのかもしれない。

後藤眞由美

安住敦の句

居待月芙蓉はすでに眠りけり

『歴日抄』昭和四十年

芙蓉は一日花だ。待ちに待った居待月が空に昇ったとき、芙蓉の花は永遠の眠りについていた。芙蓉の開花は早い。暁を待たず、月光の中に開く。朝に別れた月に、芙蓉は再び逢うことが叶わなかった。しかしながら、明日開く蕾がもう赤子のこぶしのよう膨らんでいる。月のもとで受け継がれゆく命。こよなく芙蓉を愛した師であった。

宮崎 洋

安立公彦

七月や敦師逝きて幾年ぞ

祇園会なき京の夕空朱を深む

広げある白紙のノート日の盛

青柿の未だ幼く日を被く

あめんぼう水面の夕日散らし跳ぶ



燈下集

○ 鈴木直充

梅雨に入る暮しに手抜き多くなり

にはとりの寝付きのわろし梅雨夕焼

この村の誰にも会はず濁り鮎

神棚のあたりの暗さ山女焼く

短夜の床柱より父のこゑ

○ 近藤牧男

かさぶたは一気に剥がせ青嵐

言ひきつてしまひしあとの涼しさよ

夕べなほ青き空あり涼み台

ここからは単線となる青田かな

綿菅のわた飛んで雲ふやしけり

○ 吉澤恵美子

墓まばたきばかり動くなし

走り梅雨鉛筆けづるにほひかな

北鎌倉寺々紫陽花明りかな

でで虫の歩幅は変へず思案かな

熟れバナナの大口切や老い癒す

○ 鈴木静恵

鴉の子雨情の森に育ちけり

葎切や花嫁舟を見送れる

万緑を沈めて浸る川原の湯

走り根に躓く梅雨の札所道

岬まで道真つ直ぐやカンナ燃ゆ



○ ト部 黎子

紫陽花や傘のへだつる人の距離
重版の『ベスト』の重み日雷
群れ咲きて十葉の自負暮れ残る
時流には乗れず夕べのあめんぼう
追ひ越して颯爽と行く夏帽子

○ 卯木 堯子

マタイ書の目の丸太消す青葉かな
父の日の夫の要望鴨南蛮
夕涼に回す地球儀夢遙か
見開きの絵の鳥動くかに夕立
焦点は希望に合はせ夏の月

○ 深川 敏子

恋文は横書きがよしさくらんぼ
カリカリと焼くベーコンや麦の秋
更衣神は沈黙したるまま(外出自粛)
夏越御飯ウィルス終息祈りけり(六月三十日)
筆ペンの般若心経夏椿(和女様を偲ぶ)

○ 大室 恵美子

梅雨晴や籠もりてつきし愈げぐせ
胸に来し螢火夫の化身かな
亡き父母に旅誘はれし昼寝覚
大切な歩ける元気夏帽子
一切を決むるは己夏の月

○ 尾野 奈津子

青柿の落ちて水輪のまた一つ
円空仏となに語らふや天道虫
「家守り」と言へど守宮の無気味色
子どもの飽くを知らざる浮き沈み
老ゆるてふ手かせ足かせ蟻走る

○ 小嶋 恵美

壁高く館の薔薇の咲き誇る
ペランダの星とグラスを重ねけり
半世紀かはらぬ器伽羅路に
白桃も夜汽車の窓も皆むかし
一会なりけり夜空へ放つ金亀子

○ 三宅 文子

雲の峰佃へ渡る郵便車
夏落葉女人高野へ橋ひとつ
片白草どこかせつない少年期
何ごともなけれど無気味花ダチュラ
きれいごとかばかり言ふ人薔薇館

○ 木多 芙美子

未草声を出さねば睡くなる
白雨去り前の話にもどりけり
空に溶け入る樗の花や師の忌来る
父の日やきのふを語るシャツの皺
墨痕淋漓涼しき風の渡りけり

○ 太田 慶子

階段の手摺の点字梅雨晴間
飛び上がり鉄棒つかむ青葉風
テレワーク香水うすくつけ着座
あぢさゐや鞆の中にいつも傘
本堂の百畳梅雨の深まれる

○ 小張 志げ

恋多きひとの噂や花は葉に
卵の花腐し激辛カレー大盛に
羽抜鶏昂然と時告げにけり
水無月てふ和菓子味の模糊として
漕ぎもせず二人の世界貸ボート

○ 青柳 雅子

ソーダ水ごくごく飲んで恋しらず
帰省子の犬にまとはりつかれをり
三人の吾子の臍帯土用干
紫蘇もむや夫に五人の姉妹
文芸の才連綿と桜桃忌(芥川賞候補)

○ 江草 礼

足し算も引き算も指一年生
青蔦巻き松の老樹の天を突く
一握の土に力や夏の草
手相見の言葉を信じメロン買ふ
スニーカーのおしゃれを競ふソーダ水

余言

安立公彦

面影や忽とかくれし梅雨の月

佐藤 信子

「悼・赤羽陽子さん」の前置書がある。五月二十六日、燈下集の赤羽陽子さんが急逝された。信子さん指導の、春燈早桃句会の幹事である。独り住まいと知ったのは訃報を聞いた後のことだった。この句、「忽とかくれし」に作者の動揺が伺える。故人とは年来の知友だったのだろう。「面影や」にその姿が浮かぶ。今月号には燈下集のみで、故人への追悼句が、小倉陶女さんの、〈青葉冷置かれしままの舞扇 陶女〉ほか四句あった。即ち、豊谷青峰、矢口笑子、浅木ノエ、豊谷ゆき江の皆さん。夫々思いの深い句だ。

十字切るかたちに辻や梅雨ふかし

中村嵐楓子

この「辻」は「四辻」、即ち道路が十字形に交叉している所。「十字切るかたちに」に、作者の視線の方向と、立つ位置が浮かんで来る。同じ四辻の形状を見ても、見る人によりその表現は異なる。この句はそれを「十字切る」と

してある。キリスト教徒が神に祈る時、胸に十字を切る所作だ。この十字路は市街地にある辻か。人や車の往来も繁くあろう。しかしこの句はそういう概念を一切払拭し、上五に、「十字切るかたちに」と置き、座五を「梅雨ふかし」と結んだ清澄さが素晴らしい。

磨る墨の斜め減りする半夏雨

中野さき江

この句を見ていて独り頷いた。私の場合も全く同じ。長年使っているといつしか墨の先が斜めに減っている。墨を磨るということは即ち墨書である。俳人には、短冊や色紙に染筆する機会が多い。私も年末年始の染筆は僅かだがある。作者は今染筆の最中。ふと手にした墨を見ると、その先端が斜めに磨り減っている。外を見ると折からの梅雨明け近い雨。何気ない日常の一瞬だが、それが俳句であるとさえよう。「半夏雨」の用法もみごとだ。

和菓子店前の床几や風涼し

田嶋 洋子

この「床几」は、よく店の前に置いて、人が腰を下ろしている腰掛。その店が「和菓子店」なので、床几にも風情が出てくる。腰を下ろしている人は、店で買った和菓子を味わっているのかも知れない。今でもこういう街の景はあ

らう。見ていてこころ安まる句だ。加えて下五に置かれた「風涼し」が、その街の風景を映し出しているようだ。

鈍走の何時の日止まる走馬灯

呂 秀文

五月号の「五風十雨日録」で触れた新型コロナウイルスは、その後も世界的に感染者が増え、七月二十三日の新聞では、世界計一四九六万人、米国三九〇万人、日本での感染者は二万七千人余とある。怖気立つ疫病だ。作者の住む台湾は四五一人だが、恐怖は病者の多寡に優る。今、禁足の令の出ている台湾。作者はその疫病の流行を「鈍走」と呼ぶ。しかしその「鈍走」は、世界に疫を広げる流行病である。「何時の日止まる」に、その切実な思いが籠められている。猛威を奮う疫病として、いつかは衰退する。今はただその祈りあるのみだ。「走馬灯」が優しい。

空蟬を路傍の草に戻しけり

吉川 隆

晩夏になると良く見るものに、蟬のぬけがら「空蟬」がある。蟬の幼虫は、地中に入り数年かかって蛹となり、その蛹が地上に出て木に上り、空蟬を残して僅かないのちを終える。果無い生涯だ。

今作者は、道すがら目に留めた空蟬を手にし、路傍の草叢に戻すのである。蟬も空蟬も古来多くの俳人に詠まれて

来た。〈拾ひ来しうつせみ卓におきしのみ 敦〉。作者の空蟬は、安らげく草むらに伏すのである。

翠黛の筑波二峰梅雨夕焼

神田 恵琳

作者は体調不良と新型コロナウイルス予防のため、この半年近く外出を控える生活を送っていたと聞く。保養のためにはそれが効果的だ。この句、「翠黛の筑波二峰」が、一読名峰筑波山の姿を思い浮かばせる。古来、東の筑波、西の富士と、崇め称されて来た信仰の山である。標高八七七メートルと高くないが、「嬋歌」の山として名高い。「翠黛」は緑にかすむ山の景色、「二峰」は、東の女体と西の男体の双峰。梅雨夕焼の筑波山は殊に美しい。

外つ国をテレビで旅す緑の夜

後藤眞由美

テレビが写す異国の風景は、交通機関の進歩した現在でも嬉しいものである。それは「外つ国」に限らない。私たちの住むこの日本列島にも、未踏の地はあり得るだろう。

この句、そういう外国の有り様を写すテレビ、それをゆつたりとした気分で見る作者、「テレビで旅す」にその思いが善く出ている。「緑の夜」とあるから新緑の季節だろう。句を読む私達にも、その安らぎの思いが伝わって来る。同時にこの句にも、疫病への対策の思いが揺曳する。

当月集

安立 公彦選



○ 佐俣まさを

独酌のいつか身に付き冷奴
スキップの子を飛び越ゆる夏の蝶
海紅豆散るや日蓮受難寺
夕風に汐の香生みぬ貝風鈴
四阿に遊ぶ日の斑や羊草

○ 田中嘉信

○ 室井津与志

白薔薇の白の陰影朝日影

虎杖の花や戊辰の古戦場

彫り深き紅薔薇ゆらり夕日影

万緑の力を借りてクラブ振る

咲き満つれど扉の開かぬ薔薇の園 (ゴ罗纳橋)

老鶯の声に合はずやホールイン

無心なる疏水の流れ遠郭公

大内宿の神事に終はる半夏祭

薫風やテニスコートの父娘

青田風宝の山を渡り来る

○ 山浦紀子

○ 佐藤まさ子

濃紫陽花ピアノソナタのリフレイン

夏鶯記念館の巨木かな

十葉の花の匂ひの雨となる

実習生汗拭ひつつ青田道

音弾むテニスコートや五月晴

蚊遣火を焚いてかたはら草野球

駆け込みし夜汽車の窓の夏の月

待合せはいつものベンチ百日紅

雨音に暮るる一日や敦の忌

若かりし父の写真の Panama 帽

春燈の句

安立 公彦選



薔薇園の匂ふ高さや車椅子

京都 村上 國枝

崩れても残る気高さ白牡丹

金色の波寄る湖畔未央柳

田を植えてまた新たなる村の空

つばめ反転老舗つらなる旧街道

日食や虞美人草の赤く咲く

梅雨晴間眩しき空の浮雲や

「春燈」に生きつづける句濃紫陽花 (感謝)

東京 加藤 法子

ふた親にひかれゆく黄泉梅雨の蝶

亡き夫の下駄音聴こゆ梅雨の朝

夏草やわが墓石とわが命

銀やんま生まれてすぐに飛び立ちぬ

大阪 柿原よし子

来し方のみな懐かしや風の盆

伽羅路の味の沁みたる弁当箱

神奈川 辻 泰子

一番星待つ潮風のバルコニー

付き来るは母の化身か夕蛸

梅雨最中蝶番鈍き裏出口

宮城 澤田 明子

焼け残る守礼の門や夏の月

青梅雨や地蔵の眼閉ぢししま

福井 西本 花音

ローカル線の青田の向かう山幾重

水打てばにはかに風の生まるるや

白という色なき色や氷水